



ハッブル宇宙望遠鏡

—宇宙への新しい窓—

D. フィッシャー, H. デュルベック
 渡邊鉄哉 訳
 シュプリングー・フェアラク東京
 変形B4版, ¥4,800

解説書

お薦め度
 ☆☆☆☆★

本書は1990年4月24日NASAアメリカ航空宇宙局とESA欧州宇宙局の共同プロジェクトとしてスペースシャトルによって打ち上げられた「ハッブル宇宙望遠鏡」計画の経過と、その1995年半ばまでの成果をまとめて紹介した解説書である。

第1章の「バビロンからケープ・カナベラルへ」では、古代からの天文学の歴史を簡単にのべるとともに「ハッブル宇宙望遠鏡」計画が実現されるまでの道のりを簡潔に紹介し、その打ち上げ後に判明した不完全な鏡のスキヤンドルの経緯、そして1993年12月の改修ミッションによりCOSTAR「ハッブル宇宙望遠鏡の眼鏡」が取り付けられ本来の性能が発揮されるようになるまでを、物語的に解説する。

第2章では改修された「ハッブル宇宙望遠鏡」を使っての広範な分野にわたる天文学的成果が、そのすばらしい映像と共に紹介される。宇宙の年齢は？ 大きさは？ クエーサーの謎は？ 星・惑星系はどのようにして形成されるのか？ 星の進化の最終段階はどうなるのか？ 惑星をはじめとした我々の太陽系天体の実像は？ これら天文学上最先端の問題について「ハッブル宇宙望遠鏡」はどう答えることができるのか、がとりあげられている。

第3章には「ハッブル宇宙望遠鏡」がどのように運営されているかが紹介され、さらに、1997年の2回目の改修ミッションによるSTISとNICMOSという新しい観測装置を取り付ける予定。その先2000年以降の計画などが述べられる。最後に、2005年（予定された「ハッブル宇宙望

遠鏡」計画の終了時）以降へ寿命を伸ばす提案や、その他の天文衛星計画が紹介される。

第4章は補遺として、本書にある研究結果や写真に関する情報をインターネットを使って入手する方法が簡潔に記されている。最後に日本語版オリジナルの第5章には、原版出版後に「ハッブル宇宙望遠鏡」によって得られた成果が、1996年の百武彗星(C/1996 B2)にいたるまで追加紹介されている。

本書はそのすばらしい写真を見ているだけでも十分に価値がある。また、その読みやすさとの確でわかりやすい解説文は、一般向けに十分理解できる内容で、訳もゆきとどいている。特に天文学に興味がない人や子供でもそれなりに楽しめる本だと思う。天文に興味ある友人や家族への（それとも自分自身への）プレゼントに最適だ。「ハッブル望遠鏡」による繊細な映像をたのしみながら、最新の天文学の成果を知ることのできる、たいへん魅力ある一冊である。

自宅の書棚にぜひ欲しいと思った。

関口和寛（国立天文台）